歴史地理学　56－1（268）32-49　2014. 1

熱海におけるコンテンツ・ツーリズムの普及
―金色夜叉を事例にして―

天　野　宏　司

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．『金色夜叉』の成立と流布
(1) 尾崎紅葉と『金色夜叉』
(2) 尾崎後の『金色夜叉』とメディア・ミックスの展開
Ⅲ．熱海における『金色夜叉』
(1) 熱海における観光開発
(2)「金色夜叉の碑」建立以前の状況
(3) 尾崎紅葉・『金色夜叉』の観光資源化
(4)『金色夜叉』の弊害
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．はじめに

コンテンツ・ツーリズムとは，2000年代になって台頭してきた新しい観光概念である。国土交通省・経済産業省・文化庁は共同で，2000年に『映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査』を実施し，そのなかでコンテンツ・ツーリズムについて「地域に関わるコンテンツ（映画，テレビドラマ，小説，マンガ，ゲームなど）を活用して，観光と関連産業の振興を図ることを意図したツーリズム」[1] と定義した。このような概念の台頭は，近年の観光のあり方が大きく変容しつつあることに起因する。いわゆる発地型観光から着地型観光への変容は[2]，同調査でいうコンテンツ・ツーリズムへの関心をかき立てていった。しかしながら，近年の観光のあり方の変容は，発地型→着地型への変容にとどまらない。旅行会社による催行型から，個人によるS.I.T.（Special Interest Tourism）へと変容しつつある。従って，本稿では，コンテンツ・ツーリズムを「旅行者（ツーリスト）が，映画，テレビドラマ，小説，マンガ，ゲームなどの舞台を訪問し，その世界観に身を浸潤させる観光行為，あるいはそれを促す観光誘客」と定義のうえ，以下論考を進める。

地理学の分野では，人文主義の台頭により，1990年代前半から文学作品の空間構造を読み解こうとする「文学地理学」[3] が提唱されてきたが，直接的に観光事象との結びつきを指向した研究にはなっていなかった。コンテンツ・ツーリズムに関する研究蓄積が進むのは，2000年代後半以降である。映画を対象とした「フィルム・ツーリズム」[4]，テレビ，映画を対象とした「メディア・ツーリズム」[5]，アニメを対象とした「アニメツーリズム」[6]・「聖地巡礼」[7] など，対象とするメディアで細分をしている状態や，研究者間での概念の不統一が生じている[8]。

概念規定の不統一で分かるように，このような種々の研究蓄積はあるものの，「個別の研究や報告が散見されるのみで，未だ体系立った研究蓄積は不十分である」[9] のが実情である。

このように，コンテンツ・ツーリズム研究

キーワード：熱海，金色夜叉，尾崎紅葉，コンテンツ・ツーリズム，観光資源

自体が緒に就いたばかりではあるが，歴史地理学の立場から，この領域に関する関心を持つ論考は管見の限りない。コンテンツ・ツーリズム自体が，①「一過性に終わる事例が多」[10] く，かつ②今日的な事象であるならば，歴史地理学界が関心を寄せる必然性は小さかろう。

しかし，天野[11] は映画ロケ地において，映画の刺激に端を発する誘客効果は，それだけでは一時的な集客で終わるが，適切な若返り策によって，持続性のある観光地となった事例を紹介している。これは、Butler[12] による観光地の生成・発展モデルにおける停滞・衰退期を回避した例と言える。天野のコンテンツ・ツーリズムに持続可能性があるとの見解は，歴史地理学界もコンテンツ・ツーリズム研究に与する可能性を提示した。本稿で取り扱う熱海と『金色夜叉』の結びつきも持続性の高い事象と考える。

さらに，平井[13] が指摘したように，コンテンツ・ツーリズム研究の課題として，「歴史的な流れをフォローする」必要性がある。コンテンツ・ツーリズムの概念自体は非常に新しいものの，論者はこのような事象は古くから存在していたと考える。日本におけるコンテンツとツーリズムの融合は「歌枕」と「名所」の結びつきに見られる。『都名所図会』・『江戸名所図会』などに登場する「名所」がしばしば，和歌との結びつきで紹介される事例は，日本における「観光」概念が戦間期に成立するはるか以前のこととは言え，広い意味でのコンテンツ・ツーリズムとして包含されよう。

とはいえ，本稿は名所図会類を典拠に，コンテンツ・ツーリズムの射程を江戸時代まで延ばそうとの意図は有していない。が，この概念が，「観光」の概念が成立した戦間期にも及びうるものであると言うことを尾崎紅葉の『金色夜叉』と熱海の結びつきを事例に検討するものである。

Ⅱ．『金色夜叉』の成立と流布

(1) 尾崎紅葉と『金色夜叉』

『金色夜叉』は，1897（明治30）年～1903年まで，6年間・計235回にわたり読売新聞に連載された尾崎紅葉（1868年1月10日生～1903年10月30日没）の代表作のひとつである。尾崎のスランプ，あるいは病気療養による途中休載が相次ぎ，尾崎の病没により未完のままとなる。擬古文体・雅俗折衷で執筆され，ルビを多用するなどの特徴を有し，近代小説成立期に，口語文小説が一般化する遷移期の作品と位置づけられる。

『金色夜叉』のストーリーを概略するのは未完で終わっているため困難であるが，主人公間貫一（はざまかんいち）とその許嫁鴫沢宮（しぎさわみや）が，金権主義と恋愛の狭間で葛藤する様を描く。宮が，貫一との婚約を反故にして富山唯継へ嫁ぐため，母の病気療養を理由に熱海へと籠もる。これを飜意させんと，貫一が熱海で宮を問い詰めるが，本心を明かさぬことに激怒した貫一が「姦婦!!」と宮をなじり，「脚を挙げて宮の弱腰をはたと蹴（け）」った決別の後，高利貸しとなった生活を送る様子を描いている。貫一が宮を足蹴にする有名な熱海の情景は，物語のクライマックスのひとつではあるが，『金色夜叉』の全体像からすると，1897年2月18日に掲載された，通算にして29回目のごく初期の1シーンに過ぎない（表1）。

『金色夜叉』のストーリーの原案や，登場人物のモデルについては，尾崎紅葉の盟友，巌谷小波（いわや さざなみ）[14] によると，紅葉の創作は「外国小説を読んだのと，私の方の事件のあったのとが，殆ど同時であったから，そこに双方をデッチ合せて，あの名篇を綴り上げるべき，著作熱を煽ったろう」[15] と述懐している。ここで言う「私の方の事件」とは，巌谷自身のふたつの失恋を指す。ひとつは巌谷が中学時代に書生をつとめたK家のA子嬢への求婚の失敗で，もうひとつが尾崎ら硯友社の文士た

表 1　『金色夜叉』の初出と刊本

初出表題	号(署名)	連載開始	中断	回数	中央公論社版・全集
金色夜叉	紅葉	1897年 1 月 1 日	1897年 2 月23日	32	前編
後篇 金色夜叉	紅葉散人	1897年 9 月 5 日	1897年11月 6 日	51	中編
續 金色夜叉	こうえう	1898年 1 月14日	1898年 4 月 1 日	49	後編
續々 金色夜叉	紅葉	1899年 1 月 1 日	1901年 1 月27日	57	続　金色夜叉
續々 金色夜叉	紅葉山人	1901年 1 月30日	1901年 4 月 8 日	32	続々　金色夜叉
續々 金色夜叉 続篇	紅葉山人	1902年 4 月 1 日	1902年 5 月11日	14	新続　金色夜叉

土佐 亨「『金色夜叉』初出掲載および現行本対照表」文藝と思想38，1974，31-46頁より作成。

ちが出入りをしていた芝公園・紅葉館の給仕S女との浮名である。特にS女との交際は，巌谷が京都へ赴任中にO氏に奪い去られ，このS女の振る舞いを腹に据えかねた紅葉が，貫一よろしく詰問した様子も記されている。また江見水蔭は，「世間では小波を貫一と云ってゐるが，全部然うではなく，紅葉自身も出てゐるし，又中村雪後なども取り入れられてある。お宮でも一人をモデルにしてなく，集合モデルだ。複写式モデルだ」[16] と述べており，尾崎紅葉は，複数のモデル・逸話を合わせて『金色夜叉』を作り上げていった。

巌谷の言を容れるのであれば，『金色夜叉』は巌谷の失恋話と同時に，「外国小説」の下敷きがあることになる。これについては，『ハムレット』，『嵐が丘』，『守銭奴』などの翻案であるとの種本論争が存在していた[17]。近年，堀 啓子によって，『金色夜叉』の下敷きともいうべき作品は，「ClayのWeaker Thana Woman（邦題：『女より弱き者』）である」[18] との見解が示されている。堀は，当時アメリカで発生していた「廉価多売の出版戦争の中，まさに使い捨ての，早いサイクルに取り込まれる商品」が，日本において，「多くの文豪が自作の『下敷き』を洋書に求めていた時代」に「無名の作者の作だが興味深いストーリーに出会った紅葉は，何のこだわりもなく，そこから「材料」を得ることにした」と述べ，アメリカにおける大衆娯楽文学が日本の近代文学に影響を与えていた実態を明確にした。

これらの下敷きに加え，尾崎自身も書生時代に熱海を訪問していた。江見水蔭によると，尾崎に同行した石橋思案の回想話[19] として，①1889（明治22）年1月初旬に熱海に出かけたこと，②二人は学校服に草履ばきで熱海へ出かけたこと，③樋口屋旅館は高級に過ぎて書生には敷居が高く，昼飯だけを食べて出てきたこと，④安宿の小林旅館に宿泊したが食事がまずく難儀したこと，⑤宿の外で鯵の干物を買い込み，食事の際に焼いて食べたが匂いが立ちこめて女中に怪訝な顔をされたと言う体験が語られている。これらを基に，『金色夜叉』が紡ぎ上げられていった。

(2) 尾崎後の『金色夜叉』とメディア・ミックスの展開

上述のように，尾崎による『金色夜叉』は，彼の死によって未完のまま中断した（表1）。生前尾崎は，「腹案覚書」を残しており，これをもとに，尾崎門下の小栗風葉が1909年に『金色夜叉・終篇』を出版する。小栗は，これに先立つ1905年，真砂座による『金色夜叉』の舞台化の際に「腹案覚書」を参照に脚本化したことを『金色夜叉・終篇』の序文[20] で語っている。このように，小栗風葉は『金色夜叉』の舞台化に一役買っているが，舞台化自体はそれ以前から何度となく行われてい

た。『金色夜叉』の舞台初演は，1898年3月に行われた，川上音二郎一座による市村座公演である（表２）。この舞台化脚本は，「脚本金色夜叉」として①熱海道立場茶屋の場，②熱海梅園出会いの場，③吉浜海岸月夜の場，④八官町遊佐住宅の場，⑤日比谷の原闇討の

表２　尾崎紅葉関連年表

年	年齢	月/日	尾崎の事跡　●関連事項
1868（明治元）年	0	01/10	尾崎紅葉・生
1885（明治18）年	17	２月	硯友社設立
		５月	「我楽多文庫」を発刊
1888（明治21）年	20		帝国大学入学
		12月	読売新聞社入社
1889（明治22）年	21		帝国大学退学
		01/05	**石橋思案と熱海に遊ぶ**
		04/01	巌谷小波と湯河原に遊ぶ
1891（明治24）年	23	03/10	樺島喜久と結婚→江島へ新婚旅行
1897（明治30）年	29	**01/01**	**『金色夜叉』連載開始～２月**
		09/05	「後篇金色夜叉」連載開始～11月
1898（明治31）年	30	01/01	「續金色夜叉」連載開始～４月
		03/25	●市村座による初演
		７月	『金色夜叉・上巻』出版→竹内桂舟の口絵
		10/31	●日本新演劇団による大阪歌舞伎座公演
1899（明治32）年	31	01/01	「續々金色夜叉」連載開始～1901年４月
		６～８月	塩原での療養（6月）・新潟での療養（７～８月）
1901（明治34）年	33	5月	修善寺で療養
1902（明治35）年	34	04/01	「續々金色夜叉続篇」連載開始
		02/15	●宮戸座による「金色夜叉」上演
1903（明治36）年	35	**10/30**	**尾崎紅葉・没**
1905（明治38）年		06/03	●真砂座による興業・脚本は小栗風葉
1908（明治41）年			●映画『金色夜叉』（吉沢商会）
1909（明治42）年		４月	●小栗風葉による『金色夜叉・終編』刊（新潮社）
1919（大正８）年		08/15	●金色夜叉の碑・除幕式
1925（大正14）年			●ラジオ版『金色夜叉』放送
		03/25	●東京から熱海への直通列車の運転開始
1927（昭和２）年		04/26	●尾崎紅葉の銅像建立計画
1929（昭和４）年		01/17	●第１回紅葉祭開催（村井別邸・梅園）
1934（昭和９）年		11月	●丹那トンネル開業
1941（昭和16）年			●「お宮の松」の名札設置
1954（昭和29）年		11月	●初代お宮の松枯死
1966（昭和41）年		１月	●フジテレビで帯ドラマ放映予定
		11月	●２代目お宮の松に植え替
1984（昭和59）年		２月	●砂浜復活のため砂の搬入開始
1986（昭和61）年		１月	●貫一お宮の像建立

場の計５場が，同年３月３日～３月24日まで，18回にわたり読売新聞紙上に連載された。これは，尾崎の『續 金色夜叉』の連載と平行してのことである（表２）。

ここで注目すべきは，貫一がお宮を詰問する熱海の情景が，「吉浜海岸月夜の場」と題され，熱海ではなく足柄下郡吉浜村（現湯河原町）を舞台として演じられていることである。瀬崎は，このことに加え，同年10月に大阪歌舞伎座で，日本新演劇団が行った公演では，兵庫県「舞子海浜の場」が設定されていた点や，1902～1903年の新聞記事においても「熱海」と「吉浜」が混用されている点を列挙し，「原作から脚本化のプロセスに原作の受容と解釈のあり様を抽出するならば，『金色夜叉』の初演の脚本では，貫一がお宮を足蹴にするあの海岸は，熱海という固有名に拘泥した形で設定されていたわけでなく，この近辺の海岸に対する，極めて漠然とした想像力の中に置かれていた」[21] と分析している。

さらに瀬崎は，熱海と『金色夜叉』の結びつきは，①1898年に連載小説が刊本となり，『金色夜叉』への接触が容易になったこと，②刊本に付された武内桂舟の口絵（図１）によるイメージが固定化したこと[22]，③物語の進行によって「熱海の情景」の重要性が再認識されたことに加え，④小栗風葉の『脚本金色夜叉』と真砂座公演（1905年６月３日）が「吉浜と熱海の間で揺らいでいた件の海岸を原作通り熱海の近辺へと定着させた」と結論づける。

つまり，小説の文章そのものでは脆弱な『金色夜叉』と熱海の結びつきが，口絵や舞台化といった「メディア・ミックス」[23] を通じて強化されていった。さらに『金色夜叉』のメディア・ミックス展開は演劇にのみとどまらない。1910年前後に，新体詩，絵画，浪花節，絵はがきが，大正期からはこれに映画が加わり「需要の量的拡大，質的な変化」[24] をともないながら，様々なメディアで再三繰り返される言説は（表２・表３），『金色夜叉』と熱海のイメージを全国的に再生産・強化し

図１　武内桂舟による『金色夜叉』の口絵

武内桂舟［画］・山田奈々子［著］『武内桂舟口絵集』文生書院，2013，68頁より引用。

表 3　『金色夜叉』の映画化作品一覧

公開年．月	タイトル（制作）
1908（明治41）年	金色夜叉（吉沢商会）
1910（明治43）年６月	女金色夜叉（M.パテー商会）
1911（明治44）年５月	金色夜叉（福宝堂）
1912（明治45）年１月	金色夜叉（横田商会）
1912（明治45）年２月	金色夜叉（M.パテー商会）
1912（大正元）年８月	金色夜叉（吉沢商会）
1913（大正２）年	金色夜叉（Mカシー商会）
1918（大正7）年４月	金色夜叉（日活向島）
1918（大正7）年５年	続金色夜叉（日活向島）
1921（大正10）年	金色夜叉（小松商会）
1921（大正10）年４月	金色夜叉（日活向島）
1921（大正10）年７月	続金色夜叉（日活向島）
1922（大正11）年２月	金色夜叉（松竹蒲田）
1922（大正11）年12月	傑作集粋　金色夜叉（松竹蒲田）
1923（大正12）年８月	金色夜叉　宮の巻（マキノ等持院）
1923（大正12）年12月	金色夜叉　寛一の巻（マキノ等持院）
1924（大正13）年	金色夜叉（小笠原プロ）
1924（大正13）年	金色夜叉（早川プロ）
1924（大正13）年７月	金色夜叉（日活京都第二部）
1925（大正14）年	金色夜叉（映画芸術協会）
1926（大正15）年	金色夜叉（帝キネ）
1927（昭和2）年７月	ベビー金色夜叉（帝キネ）
1929（昭和4）年	金色夜叉（最上プロ）
1930（昭和５）年５月	剣戟より生まれた金色夜叉（定キネ）
1930（昭和５）年11月	続金色夜叉　前篇（日活太奏）
1930（昭和５）年11月	続金色夜叉　後篇（日活太奏）
1932（昭和７）年１月	金色夜叉（松竹蒲田）
1932（昭和７）年９月	金色夜叉（不二映画）
1933（昭和８）年12月	金色夜叉（日活太奏）
1934（昭和９）年２月	金色夜叉（赤沢キネマ）
1937（昭和12）年６月	金色夜叉（松竹大船）

朱通祥男『日本劇映画総目録―明治32年から昭和20年まで―』日外アソシエーツ，2008，1432頁。および，日本映画史研究会『日本映画作品辞典・戦前篇［第１巻あ－こ］』霞ヶ関出版，1996，786頁より作成。

ていった。

Ⅲ．熱海における『金色夜叉』

(1) 熱海における観光開発

前章では，『金色夜叉』と熱海の結びつきは，1900年代になって小栗風葉の『脚本 金色夜叉』によって確定的なものになり，その後もメディア・ミックスを通じて再生産・強化されていく過程をたどったことを明らかにした。一方，熱海の温泉観光都市への成長

は，山村[25]により次の5期に整理される。

第1期：前近代的な湯戸制度を維持してきた江戸期

第2期：上流階級の湯治場・保養地と庶民の湯治場としての機能を保持していた明治前期

第3期：1895（明治28）年の豆相人車鉄道の開通以降，大正末までの拡充期

第4期：1925（大正14）年熱海線開通，1934（昭和9）年丹那トンネル開通による旧来の湯治場からの飛躍的発展期

第5期：高度経済成長にともなう温泉観光都市への発展期

すなわち前章で確認した『金色夜叉』と熱海の結びつきは，第3期の拡充期時代に方向付けられ，第4期の飛躍的発展期に相次ぐメディア・ミックスによる再生産・強化がなされたことになる。『金色夜叉』の「需要の量的拡大，質的な変化」と，熱海の観光開発がほぼ並行し，かつ連動していた。ちなみに『金色夜叉』に登場する熱海梅園は1886年に，横磯海水浴場は1888年と，第2期にそれぞれ開設されており，1889年に石橋思案とともに熱海を訪れた尾崎紅葉の前に『金色夜叉』の舞台は整えられていた。

(2)「金色夜叉の碑」建立以前の状況

現在の熱海において，『金色夜叉』との関連性を強く想起させる地物は，①熱海梅園，②お宮の松，③金色夜叉の碑，④紅葉の筆塚，これに加え無形物として，1月17日に開催される⑤紅葉祭[26]の5点である。このうち，『金色夜叉』の連載当時から存在していたのは①熱海梅園と②お宮の松のみである。とはいえ，お宮の松は金色夜叉の碑の建立後命名されたものであり，実質的には連載当時には樹齢200年あまりの古松としか認知されてはいなかった。

本節では，『金色夜叉』連載当時から「金色夜叉の碑」建立までの間に熱海が，各種ガイドブック類でどのように解説されていたのかを把握し，『金色夜叉』を核としたコンテンツ・ツーリズムの浸透状況を概観する（表4）。

熱海梅園は，熱海八景・梅園春暁に選定されるなど，『金色夜叉』以前から熱海の名所として知られていた。当時のガイドブックや案内絵図類を見ていくと，「熱海の勝地」として「熱海八景」を取り上げることが定式化している。村山良太郎は，梅園について「熱海本町を距る西方十町餘の幽谷にあり，梅樹数千株，林をなし軟草氈の如く，其根を被ひ，小亭点々枝間に参り，桜樹は山腹に，紅葉は渓辺に散在し，算すの奇趣亦妙なり」[27]と述べており，梅・桜・紅葉と季節ごとに浴客が散策をする場であった。

ガイドブックや案内絵図類を通覧し，熱海と尾崎紅葉，あるいは『金色夜叉』と関連させた内容が確認されたのは，1908（明治41）年出版の『伊豆新誌』が初出である。そこでは，

> 熱海梅林　町の北方にあり，明治十八年横浜の人茂木氏の開いたもので，紅葉山人の金色夜叉に依って名高くなつた。されば予は境内の光景は同氏の筆にゆづつて敢て禿筆を駆らず。君若し心あらば，此所来つて此床几に依り，此花を眺め，宮の心を察し，貫一の思ひを憐れみ給へ。又此所を辞して，夜に入りては浜辺に立ちて，波の音，松吹く風の調に『「姦婦!!』と叫んで弱腰蹴りし貫一，蹴られし宮が，口惜しさ，悲しさを忍び給へ。更に一月十七日の夜となり，月の白く愁ふるあらば，何処の空にか，さ迷ひて，宮を恨める貫一の涙の凝りし雲なるかと，熱き涙を注ぎ，尾崎氏の霊筆をたゝへ給へ[28]

と，『金色夜叉』の情景を想起しながら梅園に遊ぶことを情感豊かに語っている。ただ

表 4　熱海関連書画中における『金色夜叉』関連記述

表題	種別	著者	出版社	出版年	金色夜叉碑	磯馴松	お宮の松	筆塚	貫一茶屋	カフェーお宮
熱海温泉案内(1904(明治37)年4月再版)	G	小川徳太郎編	小川徳太郎	1900		○				
豆州熱海全図	G	鈴木貞太郎	鈴木貞太郎	1901		○				
豆州熱海全図	G	山下重房	山下重房	1903		○				
伊豆新誌	T	松島生	村上書店	1908						
皇国第一等熱海温泉全図(複写)	G	不明	小川徳太郎商店	1908		○				
新撰熱海案内	T	斎藤要八	熱海温泉場組合取締所	1918						
山から海	T	巌谷小波	博文館	1921	○	○				
熱海の栞	T	神保弥三郎	神保弥三郎	1921	○	○				
豆相温泉遊覧案内	T	宮内守三	富士火山帯温泉研究会	1922	○	○				
訂正　伊豆熱海温泉場全景(四版)	G	熱海温泉場取締所	熱海温泉場取締所	1923	○	○				
熱海温泉名所図絵	G	吉田初三郎	エス、ビー商会	1923	○	○				
熱海温泉案内	G	脇坂八九風編	温泉時報社	1925	○	○			○	
熱海温泉理想郷　桃山案内	G	初三郎	竹内同族株式会社	1925	○	○				
続・一日一文	T	鎌田敬四郎	大阪朝日新聞社	1926	○				○	○お宮バア
熱海温泉名所図絵	G	戸丸国三郎	日本温泉協会代理部	1926	○				○	
箱根湯河原熱海温泉遊覧の栞	T	堀内正夫	富士屋自動車	1926	○					
趣味旅行	T	岸谷貞次郎	敬文館	1926	○					
熱海温泉	T	齋藤要八	熱海温泉場旅館組合	1927	○	○				
熱海温泉実写案内全図	G	松井哲太郎(松井天山)	芹沢弘	1927	○	○			○	○
熱海温泉遊覧案内－東海楽園伊豆－	G	湯河俊次	敷島屋商店	1929	○	○			○	○
日本温泉案内東部篇	T	大日本雄弁会講談社編	大日本雄弁会講談社	1930	○	老松				
熱海・伊豆山温泉と附近鳥瞰図	G	湯河俊次	伊豆観光會	1934	○	○				
いでゆの旅:伊豆の温泉と山水	P	柘植清	静岡県観光協会	1936	○	老松				
伊豆の番頭[増訂第6版]	T	芹澤天岳	芹澤天岳	1937	○	老松		◎		
勝地漫画熱海温泉	G	菅田濱次郎編	勝地漫画刊行會	1937	○	○		◎		
最新熱海市全図(熱海温泉鳥瞰図)	G	不明	熱海市全国刊行會	1939	○	○				
熱海温泉観光図	G	二川吉次編	熱海市観光課	1939	○	○		○		
熱海温泉観光図	G	駒宮正一・大竹正太郎編	東海民報社	1947	○		○	○		
伊豆の番頭[増訂19版]	T	芹澤天岳	芹澤天岳	1954	○		○	◎		
最新熱海市全図	G	森芳雄・加藤周一	観光展望社	1955	○		○	○		
熱海	G	熱海修学旅行旅館連盟	熱海修学旅行旅館連盟	1960's			○			
熱海温泉	P	熱海市観光課	熱海市観光課	1960's			○			

◎は「お宮のスリムキ石」が併記されているもの
種別中，Gは絵画資料，Tは文字資料，Pは写真帖を示す。

し，このような視線は例外的なものであり，ほぼ同時代の『熱海温泉案内』[29] や『新選熱海案内』[30] などでは依然として旧来の説明がなされ，熱海梅園はおろか，熱海全体についても尾崎紅葉や『金色夜叉』に関する説明はなされていない。絵画資料上も，後に「お宮の松」と呼ばれる，樹齢200年あまりの松の古木とおぼしき図像が，『金色夜叉』とは無縁に描写されているのみである。

このような様子を，松崎天民は「熱海の人は鉄道を布いてくれた雨敬老人と，率先して別荘を建てれた三浦観樹将軍と，前の島尾子爵とを，三大恩人に数へて居る。別に『金色夜叉』の舞台に使ってくれた恩人として，尾崎紅葉山人に対しても，近頃やっと感謝の心を捧げるようになったらしい。」[31] と記述している。この記述は，「金色夜叉の碑」建立の前年にあたり，この段階，すなわち『金色夜叉』の全国的な普及とメディア・ミックスによる需要層の拡大期には，コンテンツ・ツーリズムの浸透はほぼなかったといえる。

図２　金色夜叉の碑
（2013年５月　筆者撮影）

(3) 尾崎紅葉・『金色夜叉』の観光資源化

前節では，「金色夜叉の碑」以前には，熱海では積極的に尾崎紅葉や『金色夜叉』を誘客に利用する動きや，熱海との関連性を紹介する文章類がほぼ皆無であることを確認した。

熱海の側で，積極的に「尾崎紅葉」あるいは『金色夜叉』を観光資源化する動きは，1919（大正８）年に除幕された「金色夜叉の碑」建立に始まる（図２）。神保弥三郎によると，この碑の建立は「不肖等，町有志と相謀り，風葉子に乞うて『宮に似たうしろ姿や春の月』の句を刻し，地を横磯海岸に相して建立したり―磯馴松奇しく這ひ拡がりたるほとりにあり―今年は三周忌に当るを以って，何にがな供養しまほしと思ふなり―」[32] とある。

神保は富士屋自動車に勤めるおり，送迎を担当した浴客から『金色夜叉』を記念するものがないと言われ，この碑の建立を思い立ち，たばこで財をなし，熱海に別荘を構えた村井吉兵衛の協力で実現したと述懐している。村井をはじめとする「町有志」は碑石背面の「建碑寄附者芳名」[33] により明らかになる（表５）。この30名の生業を把握すると，21名が旅館経営者であり，生業が明らかな残り４名も村井を除けば皆，サービス業に従事していることから，この碑を熱海観光の誘客の核にしようとの意図[34] がうかがえる。この石碑の設置後，1920年代以降に出版された熱海を紹介するガイドブック類には『金色夜叉』・「金色夜叉の碑」の紹介が付随するようになった[35]。

齋藤は「『宮に似た後ろ姿や春の月』と云ふ風景の句を刻んだ石碑がある。横磯海岸磯馴松の這拡がれる辺に立って居る風光もよく今は名所の一つになった」[36] と，新たに創出

表 5　「金色夜叉の碑」寄附者一覧

寄付者	銅像	生　業	寄付者	銅像	生　業
村井吉兵衛		村井銀行社長	小岩井幸吉		不明
野田惣八		[宿]隠居玉屋本家	福井福寿		[宿]福寿館か？
露木聡三	○	[宿]香露館	芥川九衛門		[宿]伊勢屋
野田郊策	○	[宿]隠居玉屋別荘	鈴木良三郎		[宿]鈴木屋
浦井亀吉		[宿]新玉屋	鵜澤辰之助		[宿]新角玉
芹澤弘		芹沢百貨店・新聞「新熱海」発行者	杉崎峰吉		熱海町議・熱海名所温泉経営者
杉(松？)井岩次		[宿]玉久	土屋庄作		不明
野口庄左衛門		[宿]尾張屋	藤井梅吉		[宿]温泉旅館藤井
神保彌三郎		『熱海の栞』著者・富士屋自動車経理	内田市郎左衛門	○	[宿]古屋・元町長・熱海合同運送・熱海ガス・富士屋自動車取締役
吉田政吉		[料理仕出し]住よし	對木敬助		[宿]うろこ屋
山田藤吉		[宿]枡屋	野田久七		[宿]角玉屋
前田勝次		不明	内田浮次郎		[宿]真誠舎
樋口忠助		[宿]樋口	米倉清吾		[宿]米倉・町議
斧直七		[宿]大黒屋	濱田文作		[宿]相模屋
青沼沃		不明	松尾宗兵衛		[宿]福島屋

銅像は，尾崎紅葉銅像建立発起人との重複を示す。
斎藤要八『新撰熱海案内』熱海温泉場組合取締所，1914。神保弥三郎編『熱海の栞』神保弥三郎，1921。日本遊覧旅行社編『全国都市名勝温泉旅館名鑑(昭和5年版)』日本遊覧旅行社，1930。阿部興資『熱海温泉繁盛記』阿部興資，1932から作成。

された観光資源が8年間で定着した様子を述べている。ここで注目したいのは，この齋藤の記述には「お宮の松」[37]の語は登場しないことである。おそらくは「磯馴松（そなれ）」が今日言うところの「お宮の松」に相当するが，この段階では呼称としての定着は無かった。絵画資料でも磯馴松の図像は付随するものの「金色夜叉碑」とのみ文字注記が付された状態が続く（図3・表4）。

というのも，「お宮の松」との呼称の定着は，碑の建立よりも後のことで，熱海市観光課[38]によると，当初「羽衣の松」と呼ばれていた「磯馴松」に1941年に「お宮の松」との名札を設置し，この呼び名が定着していった。このため，ガイドブック類で「お宮の松」との表現は1947年（表4）が初見であり，戦後まで確認できなかった。『伊豆の番頭』第6版（1934年刊）と，第19版（1954年刊）との間で「金色夜叉の碑」に関する記述を比べると，

第6版；此の海岸，磯浜に近い老松の，傍らに建つ紀念碑[39]

第19版；此の海岸，道路の中央，お宮の松の傍に建つ記念碑[40]

と，表現が変わっている。さらに「お宮の松」は，時間の経過と共に「金色夜叉の碑」を上回る存在となり，「お宮の松」単独で表現される事例も登場する（図4・表4）。

「金色夜叉の碑」に次いで，1927年4月には尾崎紅葉像建立計画が発起される[41]。この発起人8名を表6にまとめた。歴代町長・市長を務めるような人物が列挙され，「金色夜叉の碑」との重複は3名確認される。この計画は，1935年になりようやく「古鏡を潰して紅

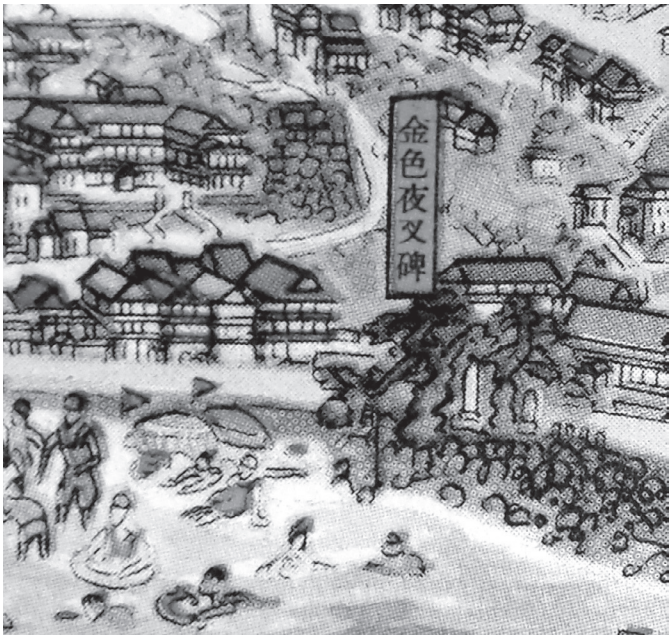

図 3　金色夜叉碑の表現

二川 吉次編『熱海温泉観光図』熱海市観光課，1939，部分，熱海市立図書館蔵。

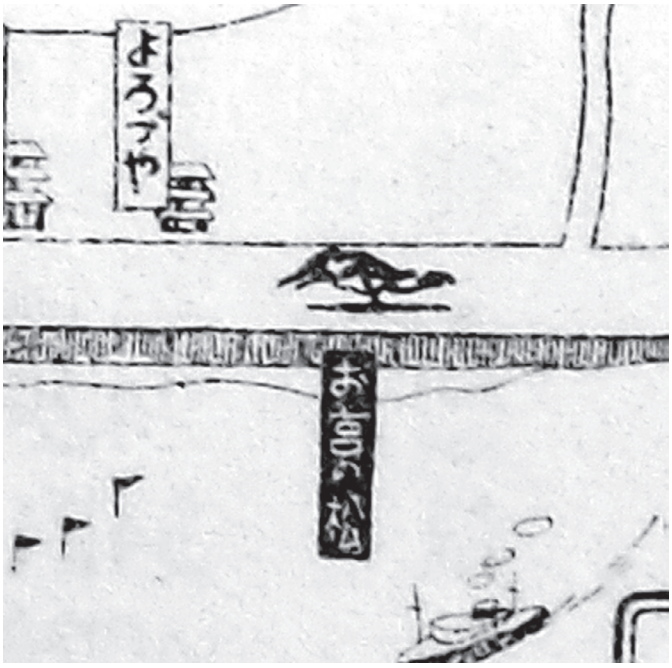

図 4　金色夜叉碑の表現変化

熱海修学旅行旅館連盟『熱海』熱海修学旅行旅館連盟，1960年代，部分，熱海市立図書館蔵。

表 6　尾崎紅葉銅像　建立発起人

発起人	碑	役　　職
小林貞三		不明
濱田四郎		不明
石渡要吾		町長・常春荘を経営・[宿]相摸屋
内田市郎左衛門	○	町長・[宿]古屋
露木聡三	○	町議・熱海旅館副組合長・[宿]香露館
野田郊策	○	[宿]隠居玉屋
水谷良雄		町長
岸衛		町長・県会議員・衆議院議員・[宿]熱海ホテル総支配人など

碑は，「金色夜叉の碑」寄附者との重複を示す。
役職は生涯を通じてのもの。

葉山人の銅像」[42] 作りへと具体化するが実現したのかどうかは続報を欠くため不明である。

1931年になると，国鉄熱海駅近くに「紅葉山人筆塚」が田原町会の手によって建てられる。「金色夜叉の碑」が『金色夜叉』という非実存空間を実存空間へ表出させ，来訪者を作品世界へ浸潤させる装置として機能したとすると，筆塚は実在の尾崎紅葉そのものを顕彰する存在である。しかしながら，筆塚のかたわらには，「お宮のすりむき石」が設置されていた（図５）。この石は「おみやのスリムキ石と云ふ，一寸ナンセンスな石が有ります」[43] との評価を受けつつも，熱海駅周辺においても『金色夜叉』の世界へ来訪者を誘導する装置が設置された[44]。

このように，1920年代以降熱海町の側から『金色夜叉』の世界観を積極的に提供することが行われていき，あたかもこの世界観が実存であるかのごとき錯覚すら生み出していったことを岸谷は次のように述べている[45]。

> 番頭が梅が見頃だから見て来いと言ふ。「金色夜叉」の貫一とお宮の遺跡だそうな。小説もかう俗化すると事実のあったような気をさせるものと見える。金色夜叉の碑などいふ碑が浜辺にあるといふから驚かざるを得ない。僕は貫一もお宮も大嫌ひだから梅見にも行かぬ。碑など見に行くのは真平だ。

岸谷は，『金色夜叉』の非実存性そのものが喪失するほどに俗化していることを敬遠し，コンテンツ・ツーリズムの浸透に対する評価が二分していたことがわかる。このような評価の差は，次の二者にも現れてくる。

> 江見水蔭；「紅葉の『金色夜叉』のクライマックスは餘りに早く出現した。何といつても熱海の海岸が一番熱の昇騰した書き方だと思ふ。それ故，紅葉といへば『金色夜叉』。『金色夜叉』といへば熱海の海岸―其処で又熱海では，貫一茶屋だの，お宮バアだの，金色夜叉何々といふ土産物まで出来てゐて，殊に金色夜叉の記念碑まで建立されてゐるが，土地の人々は全くお宮も貫一も実際生存してゐた人のやうに考えてゐて「現在石碑の建つてゐるところがお宮貫一別れの場所です」なんて納まり切つてゐるのだから滑稽だ（下線は論者による）。」[46]

> 坪内逍遙；「貫一茶屋だの，カフェーおみやだのと俗悪極まる名の，至つてお粗末な，田舎臭い，洋風二階三階のコンクリート建築が，海岸へ行列を揃へたさまは，一

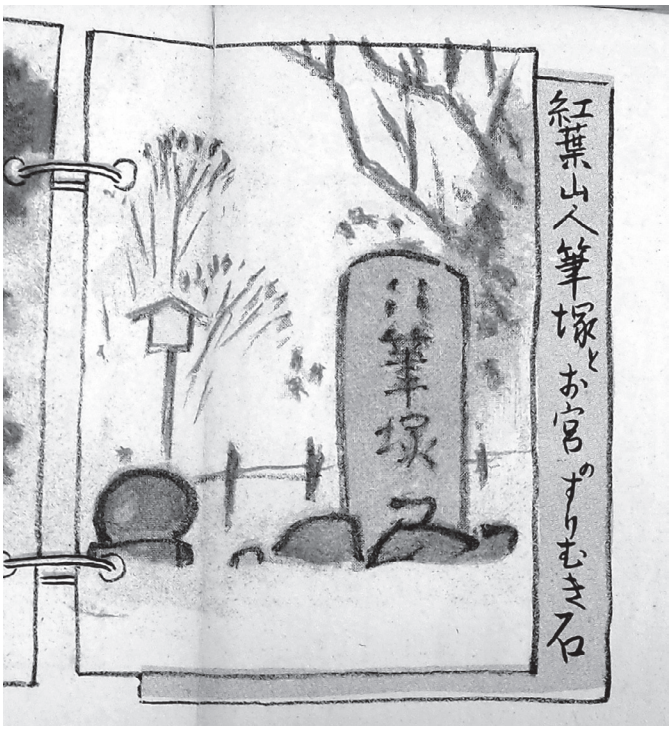

図５　紅葉筆塚とお宮のすりむき石

菅田濱次郎編『勝地漫画 熱海温泉』勝地漫画刊行會，1937，部分，熱海市立図書館蔵。

見滑稽であるが，馬鹿らしくなる（下線は論者による）。」[47]

両評価の差は，尾崎に引き立てられ，ともに硯友社で活動をした江見が肯定的であるのに対し，古き良き熱海への懐古と俗化に対する嫌悪にあふれる坪内との立脚点の差にほかならない。とはいえ，両者がともにコンテンツ・ツーリズムが浸透してきた結果として取り上げている貫一茶屋，カフェお宮は実在が確認される。貫一茶屋は，図６に示すように，熱海の海岸通り，糸川河口の海水浴場に近接した２階建ての建物で，坪内の嘆き通りであった。一方カフェお宮は，坪内の言うような海岸沿いではなく，古屋旅館のはす向かいに位置していた（図７）。松井天山の手による図７の裏面には観光案内とともに，旅館・営業者の広告が載せられている。これによると，貫一茶屋とは住よしの別号で，「金色夜叉の碑」建立に当たって寄附を行った30名の内，吉田政吉が経営する仕出し料理店であった。すなわち，『金色夜叉』の観光資源化を積極的に行った人物が，さらにこの世界観を活用しようと，貫一茶屋と称したわけである（表５）。

このほかに，1929年からは「紅葉祭」が毎年1月17日に開催されることになる。第１回は「金色夜叉の碑」にほど近い村井別荘で開催され，尾崎紅葉の未亡人と長男のほか，硯友社関係者が招かれている[48]。興味深いのは，この催しに坪内逍遙も出席をしている点である[49]。つまり坪内は，尾崎紅葉の『金色夜叉』が熱海における，コンテンツ・ツーリズムを形成したことは認めるものの，結果と

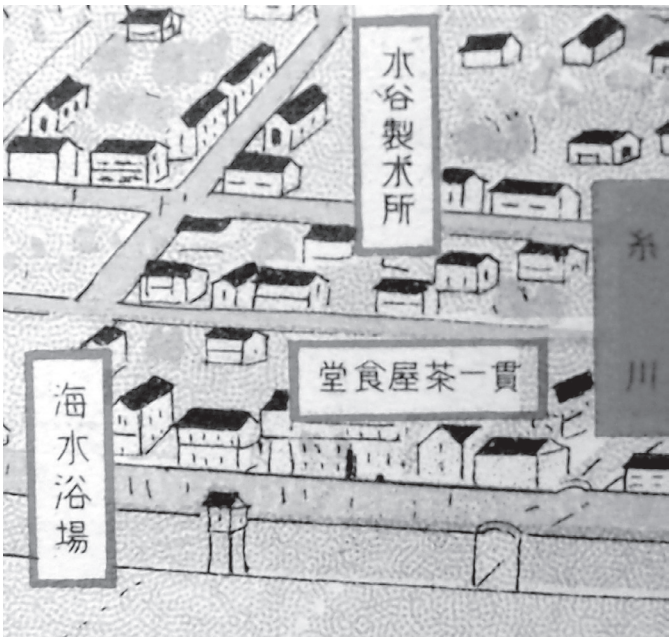

図 6　貫一茶屋の表現

脇坂 八九風編『熱海温泉案内』温泉時報社，1925，部分，熱海市立図書館蔵。

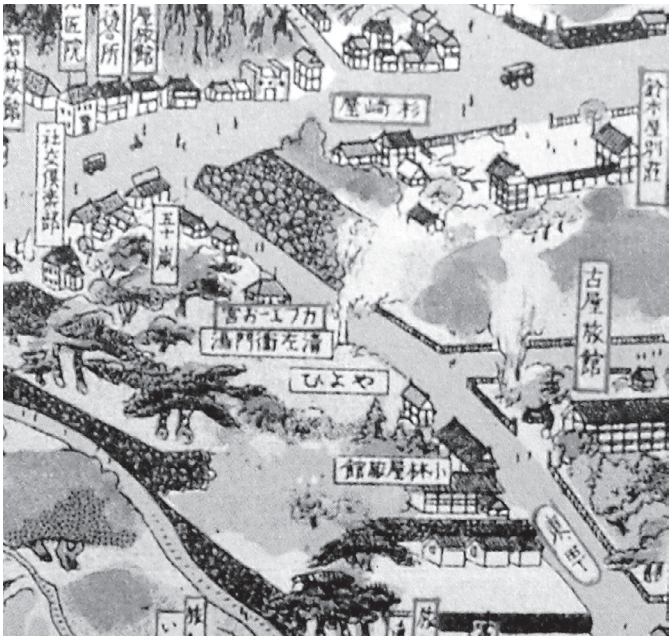

図 7　カフェお宮の表現

松井哲太郎（天山）『熱海温泉実写案内全図』芹沢 弘，1927，部分，熱海市立図書館蔵。

して俗化し，熱海海岸の眺望が損なわれていることに憤慨していたと理解できる。

以上のように，熱海における『金色夜叉』を核としたコンテンツ・ツーリズムの浸透は1920年代を通じて進行した。「金色夜叉の碑」以外は，何れも1925年の熱海線開業以降の事象である（表２）。これを山村による熱海の観光開発の時期区分に当てはめると，鉄道開通によってもたらされた熱海の飛躍的発展を補足する存在として，『金色夜叉』が活用されていった。

(4)『金色夜叉』の弊害

前節では，『金色夜叉』の世界観が熱海に浸透し，来訪者がその世界観に身を浸潤させるコンテンツ・ツーリズムが，熱海の飛躍的発展期に形成されていく過程を確認した。

コンテンツ・ツーリズムの浸透に対する反応は是非双方の立場が存在していたが，『金色夜叉』の世界観が熱海に浸透した結果，ある弊害が生じるようになる。ある弊害とは自殺・情死・心中・家出の類いの増加である。読売新聞の記事検索データベース「ヨミダス」で熱海に関する記事を通覧してみると，熱海における自殺記事は1920年８月２日が初見である[50]。この記事は，「金色夜叉碑前の海中で妙齢の美人　投身を企つ」と題され，さらに同年９月３日記事では「投身者の巣となった昨今の熱海海岸」[51] とその増加を憂いる記事が掲載されている。

図８はヨミダスで確認できる心中類に関する記事の推移を示したものである。図８によると，明らかに1925年の熱海線開業・1934年の丹那トンネル開通という交通環境の改善と軌を一にして自殺記事が増加している。記事を丹念に見ていくと，「許されぬ恋に可憐な情死　早稲田商業生と渡辺女学生　熱海へ行って投身」[52]・「下宿が結ぶ恋　添えぬうき世を悲観して明治学院生熱海で心中未遂」[53] と，若い男女が悲恋の果てに，東京から熱海までわざわざ出かけてきたうえでの心中事件が多数確認された。

Phillipsは，メディアによる報道が模倣自殺の連鎖を生み出すことを「ウェルテル効果」[54] と命名した。熱海における自殺関連記事の増加は，報道そのものが自殺者を更に誘

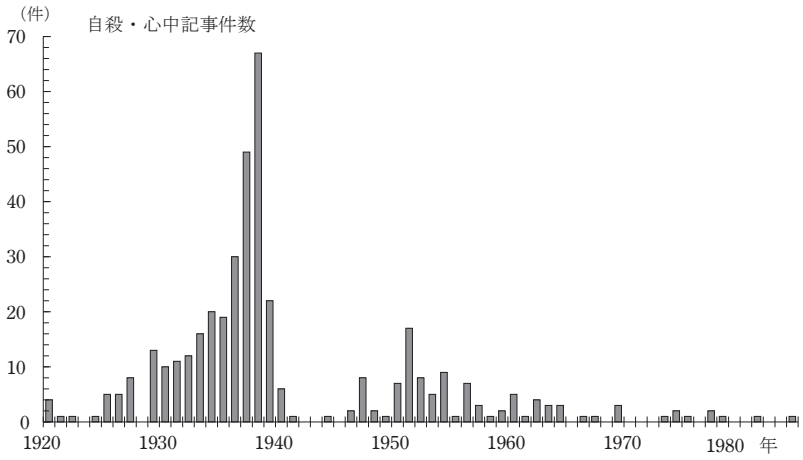

図８　熱海における心中記事の推移

読売新聞「ヨミダス」をもとに作成。

引している可能性もあろうが，わざわざ熱海を終焉の地に選ぶ若い男女の心情の一端を，貫一・お宮の二人の人生に求めるのは早計であろうか。

Ⅳ．おわりに

尾崎紅葉によって読売新聞紙上に連載された『金色夜叉』は，未刊で終わったものの，演劇を初めとするメディア・ミックスや，小栗風葉による補作を通じ，世に流布していった。この過程と，熱海の観光地としての発展段階が歩調を合わせるように進展し，熱海線の開通以降の拡充期に，大々的に『金色夜叉』との結びつきを想起させる地物を設置して，熱海の側からコンテンツ・ツーリズムを成立させるべく働きかけていったことを確認した。この過程において，小説という非実存の世界観を，熱海という実存空間へ表出させるため，「金色夜叉の碑」に小栗風葉の句を刻み，紅葉祭には遺族や硯友社の関係者を招待するなど正当化・権威付けの工夫が行われた。このような熱海における『金色夜叉』を核とした誘客は，悲恋の果てに身を投げる若者の来訪を集めるほどに成果を上げた。

すなわち，本稿の執筆目的である，近年成立したコンテンツ・ツーリズムの概念は，今日的な事象に限定されるのではなく，日本において観光が成立した戦間期まで溯及させうることを説明できたと考える。

本稿では，戦後の熱海については意図的に言及してこなかった。1960年代に新婚旅行ブームや慰安旅行の増加で熱海は隆盛を極め，年間550万人を超える宿泊客を受け入れていた。1964年の東海道新幹線の開通は，熱海以外への行楽の選択肢を増大させ，その後宿泊客数は減少する。このような衰退基調の中，減少への歯止めを期して1985年には貫一・お宮の像が建設され，またしても熱海は『金色夜叉』に依存した地域振興を企てるものの，この時期には『金色夜叉』というコンテンツ自体に観光客に訴求する力が失われ，今日では年間300万人を割り込むまでになった。

だが，熱海がコンテンツ・ツーリズムに依存する姿勢は今日的にも見て取れる。2010年夏には，ゲームソフトメーカーKONAMIが開発したニンテンドーDS用ゲーム『ラブプラス』と連動した「熱海 ラブプラス＋現象（まつり）」が展開された。イベントの詳細を語ることは本稿の目的から逸脱するので割愛するが，またもや非実存の「ラブ」を観光資源として活用した。

歴史地理学的には，「歌枕」と名所の結びつきをコンテンツ・ツーリズムの概念の中に包含しうるか検討する必要を感じるが，今後の課題として提言し本稿を結ぶ。

（駿河台大学）

〔付記〕

本稿の執筆にあたり，次の各機関には資料閲覧・複写で便宜を図っていただいた。熱海市立図書館・国立国会図書館・大正大学附属図書館（順不同），記して感謝いたします。特に熱海市立図書館所では，多忙ななか無理難題な資料出納にお応えいただくとともに，館蔵資料を本稿へ掲出することに対し許諾を頂いたことを付記いたします。

〔注〕

1）国土交通省・経済産業省・文化庁『映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査』2005，99頁。

2）着地型観光とは，既存の観光形態（発地型）とは異なり，目的地に所在する旅行業者が企画する募集型企画旅行による観光を指す。これに対し，発地型とは，出発地に所在する旅行業者が企画する形態である。着地型観光の浸透は，旅行者のニーズが細分化して来たことに加え，旅の目的の先鋭化が進んできたこと，旅行者が団体行動を避け，旅行するグループの構成人数が少なくなっていることなどから，より現地の情報に特化した企画が好まれる傾向が強くなってきたことにより生じてきた。

3）小田匡保「文学地理学のゆくえ―杉浦芳夫編『文学 人 地域』はなぜ面白くないか」駒澤地理33，1997，101-116頁。杉浦芳夫『文学のなかの地理空間―東京とその近傍』古今書院，1992，308頁。杉浦芳夫編『文学・人・地域―越境する地理学』，古今書院，1995，312頁など。

4）中谷哲弥「フィルム・ツーリズムに関する一考察―『観光地イメージ』の構築と観光経験をめぐって」奈良県立大学研究季報18-1・2，2007，41-56頁。中村哲「映画･テレビドラマの観光行動への影響―フィルム・ツーリズムへの試み」敬愛大学総合地域研究１，2011，43-58頁など。

5）①平井智尚「メディア・ツーリズムに関する一考察―メディア研究からのアプローチ」慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学・心理学・教育学68，2009，160-163頁。②天野宏司「世界の中心で愛をさけびつづけられるか？―メディアツーリズムと持続的利用に関する検討」駿大論叢18-2，2011，1-15頁など。

6）岩間英哲ほか「コンテンツによる地域振興の研究―アニメツーリズムの成立条件と構造」専修ネットワーク＆インフォメーション21,2013，17-26頁など。

7）岡本 健ほか「アニメーション作品が観光振興に与える影響に関する研究（その１）アニメ聖地巡礼の誕生と展開」日本観光研究学会全国大会学術論集23，2008, 349-352頁。山村高淑「観光情報革命と文化創出型観光の可能性―アニメ聖地巡礼に見る次世代ツーリズムの萌芽」地域開発533, 2009，32-36頁。神田孝治「白川郷へのアニメ聖地巡礼と現地の反応―場所イメージおよび観光客をめぐる文化政治」観光学７，2012，23-28頁など。

8）2010年にコンテンツツーリズム研究会，2011年にコンテンツツーリズム学会が相次いで発足し，「コンテンツ・ツーリズム」の語に収斂しつつある。

9）山村高淑「コンテンツツーリズムを巡る社会の動向と関連研究の今後の可能性」『観光資源としてのコンテンツを考える』北海道大学観光学高等研究センター，2012，１頁。

10）増淵敏之「コンテンツツーリズムの現状とその課題」都市計画61-1，2012，20-23頁。

11）前掲５）②。

12）Butler, R.W., “The concept of A Tourist Area Cycle of Envolution: Implication for Management of Resources,” *Canadian Geograoher* 24-1，1980, pp.5-12.

13）前掲５）①，162頁。

14）1870年７月４日生～1933年９月５日没。尾崎らが設立した硯友社に入り，機関誌「我楽多文庫」に作品を発表する。その後，近代日本児童文学を開拓した。尾崎紅葉とは，私的なつきあいが深く，連れだって湯河原・江ノ島などで遊ぶ様子が巌谷小波の日記に綴られている。

15）巌谷小波『金色夜叉の真相―所謂る間貫一の告白』黎明閣，1927，409頁。

16）江見水蔭『硯友社と紅葉』改造社，1927，214頁。

17）例えば，剣持武彦「『ハムレット』と『金色夜叉』」短大論叢（関東学院女子短期大学）42，1971，55-78頁。山本健吉「『嵐が丘』と『金色夜叉』―小説の再発見４―」文學界16-5，1962，119-123頁。勝本清一郎「『夏小袖』について」明治大正文学研究９，1952，13-18頁など。

18）堀　啓子「『金色夜叉』における翻案的側面」新日本古典文学大系明治編 月報，2003，http://www.iwanami.co.jp/moreinfo/2402190/top.html#（2013年７月６日閲覧）。引用文中のClay（Bertha M.Clay）は，イギリス人女性Charlotte Mary Brame（1836-1884）のペンネームである。

19）江見水蔭「金色夜叉と熱海」鎌田敬四郎編『一日一文・続』大阪朝日新聞社，1926，303頁。

20）当時複数の『金色夜叉』の続編と称するものが流布しており，これらを駆逐することも，小栗の執筆動機のひとつであった。

21）瀬崎圭二「『金色夜叉』と熱海―口絵の力と現在―」，国文学攷（広島大学国語国文学会）201，2009，1-15頁。

22）新聞連載時には無かった口絵が，小説には附された。小説では言及されない貫一の服装や，（その後の）お宮の松とおぼしき松な

どが武内の口絵には描かれ，読者のイメージとして固定化されていく。

23）関は，このような状況を，新聞小説と新派の演劇が1900年前後に「互恵的な関係」にあり，「そうしたメディア・ミックスの嚆矢として『金色夜叉』」があったとする（関肇『新聞小説の時代―メディア・読者・メロドラマ』新曜社, 2007，64頁）。関が用いる「メディア・ミックス」は，表現形態・媒体が混交することを指す。

24）前掲23）85頁。

25）山村順次「熱海における温泉観光都市の形成と機能」東洋研究22，1970，38-72頁。

26）1月17日は，貫一お宮の熱海の情景が繰り広げられたその日である。

27）村山良太郎編『熱海土産保養の栞』喰汽館，1897，34頁。

28）松島　生『伊豆新誌』村上書店，1908，57頁。

29）小川徳太郎編『熱海温泉案内』小川徳太郎，1900（再版）。

30）齋藤要八『新選熱海案内』熱海温泉場取締組合,1918（再版），201頁。

31）松崎天民『温泉巡礼記』磯部甲陽堂，1918，172-177頁。

32）神保弥三郎編『熱海の栞』神保弥三郎，1921，19-22頁。なお，ここでいう「三周忌」とは，尾崎紅葉の三周忌ではなく刊年から判断して建立から「三周」年の意であろう。

33）ただし，請負人 伊勢由松のミスであろうか，玉久旅館主人の松井岩次を「杉」井と誤刻が確認される。

34）碑文に『金色夜叉・終篇』を執筆し，尾崎の後継者の地位を得た小栗風葉の句を刻んだことは，非実存性なる『金色夜叉』の世界観に対する権威付け，あるいは正当化の試みであろう。『金色夜叉』の非実存性は，建立の許可を静岡県に求めた際に障害となり，「紅葉山人紀念」の文字を入れることで許可を得たと言われている。1920年には，尾崎の盟友・巌谷小波も熱海を訪問し，この碑を実際に見学し，正当性の追認が行われている。

35）管見の限りでは，その初見は，前掲32）であるが，建立当事者の著作であるため除外すると，宮内守三『豆相温泉遊覧案内』富士火山帯温泉研究会，1922，118-121頁が嚆矢である。

36）齋藤要八『熱海温泉』熱海温泉場旅館組合，1927，24頁。

37）ここで言及されている「磯馴松」は1954年に枯死した初代を指している。文政12（1829）年にすでに樹齢150年ほどの枝振りの良い古松として知られていた（熱海市観光課『新お宮の松誕生祭に寄せて』熱海市観光課，1966，1頁）。現在の松は1966年に移植された二代目である。

38）熱海市観光課編『新お宮の松誕生祭に寄せて』熱海市観光課，1966。

39）芹澤天岳『伊豆の番頭 第6版』伊豆温泉名所遊覧案内所，1934，206頁。

40）芹澤天岳『伊豆の番頭 第19版』伊豆温泉名所遊覧案内所，1954，235頁。

41）1927年4月26日「紅葉山人の銅像ができる」，読売新聞 朝刊，7面記事。

42）1935年1月16日，読売新聞 夕刊，2面記事。

43）前掲39）46頁。

44）現在は「お宮のすりむき石」は筆塚周辺で確認できないが，1954年に刊行された前掲40）にも同じ記述が有り，この頃までは存在していたと考えられる。

45）岸谷貞次郎ほか『趣味旅行』敬文館，1926，127-128頁。

46）前掲注19）16-19頁。

47）薄田斬雲編著『半峯・春城・逍遥三翁熱海漫談』富士書房, 1929，172-175頁。同書は鼎談を綴ったものだが，引用箇所は坪内逍遙の発言として記録されている。

48）1929年1月17日，読売新聞 朝刊，7面記事。

49）1929年1月19日，読売新聞 朝刊，4面記事。

50）1920年8月2日，読売新聞 朝刊，5面記事。

51）1920年9月3日，読売新聞 朝刊，5面記事。

52）1929年2月3日，読売新聞 朝刊，7面記事。

53）1935年6月13日，読売新聞 夕刊，2面記事。

54）Phillips, David P., “The influence of suggestion on suicide: Substantive and theoretical implication of the Werther effect.” *American Sociological Review*, 39-3, 1974, pp.340-354.